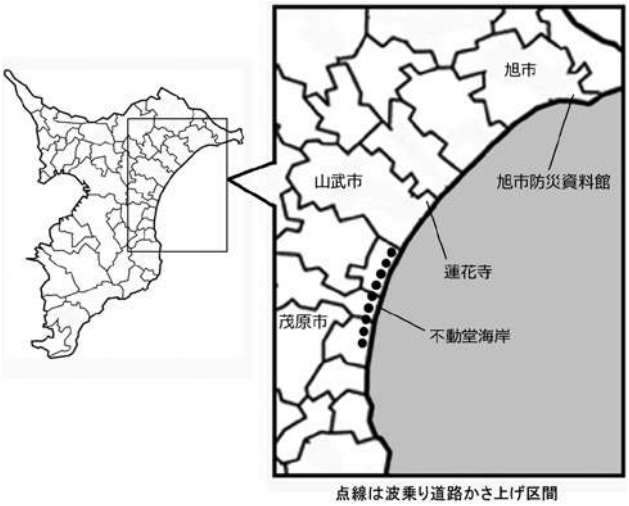
活動報告

地震防災フィールドワーク「九十九里地域の津波防災を考える」

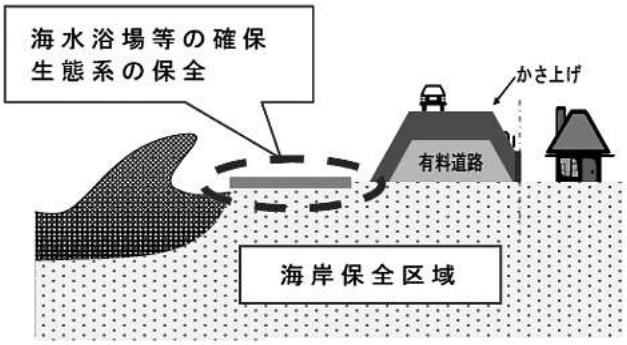
千葉県地方自治研究センター　理事　**赤荻　渉**

2017年11月８日、今年度の千葉県地方自治研究センターのフィールドワークが、巨大地震が再びやってくると叫ばれているなか、「九十九里地域の津波防災を考える」と銘打って実施されました。このフィールドワークには会員21名が参加し、津波対策として実施されている波乗り道路のかさ上げ工事現場の視察、元禄地震による津波犠牲者の慰霊塔の調査、旭市の東日本大震災における被災及び復興状況の調査について実施しました。当日は、調査を開始する度に雨に見舞われる「意地悪」な天候でしたが、現地の自治体職員等の方々の丁寧な対応で、調査の目的は無事に達成することができました。

図表１　九十九里地域の概略図



図表２　波乗り道路かさ上げイメージ図



出所：千葉県ＨＰ（https://www.pref.chiba.lg.jp/）
2018年1月29日アクセス

■波乗り道路のかさ上げ工事及び九十九里沿岸の海岸津波対策等の調査

午前８時35分、一行を乗せたバスは、千葉駅近くのＮＴＴ千葉支店前を雨が降りしきるなか一路、最初の目的地である大網白里市へ出発しました。バスの中では、調査を開始するに当たって自治研センター顧問の若井康彦氏が、「災害は忘れた頃にやってくる」関東大震災から100年たっている、どうしたらよいか歴史から学ぶ必要があると、今回の調査の目的を強調しました。

９時30分、大網白里市の不動堂海岸に到着し、前面に太平洋、背面に波乗り道路を臨める貝のサザエを模した展望台にのぼり、ここで合流した千葉県河川整備課海岸砂防室主査である松宮正紀氏から説明を受けました。

千葉県では既設の波乗り道路8.9㎞を全線通行止めにしてかさ上げ工事を実施中であり、そのうち九十九里町片貝から真亀JCT間3.2㎞が完成し2017年７月に開通している。現在は、真亀JCT

不動堂海岸の展望台で波乗り道路のかさ上げ工事の説明を受ける

から白子町古所北岸までの5.7㎞を工事中であり、2017年12月の開通を予定していること、工事は、現在の道路を約２mかさ上げするもので、予想される津波の高さを６mとして設計されているとの説明がありました。なお、千葉県は震災被災地としての位置づけがあり、すべて国費によって賄われているとのことでした。

■山武市内、蓮花寺の津波供養塔の調査

次に、津波の供養塔がある山武市を目指しました。途中、いくつかの河川で津波対策としての護岸工事が行われている現場を通りました。大規模な津波では、川の浸水が想定外の被害を及ぼすことが説明されました。山武市に入り、百人塚、千人塚と呼ばれている場所を車中から遠望しました。元禄の津波がいかに大規模な被害を及ぼしたことが偲ばれます。10時55分、浄土宗蓮花寺（1429年・永享元年開山）に到着しました。ここで蓮花寺住職樋口義之氏、山武市歴史民族資料館勝山康氏の案内をうけました。

1703年（元禄10年）11月22日～23日、午前２時～３時にかけて地震による４～８mくらいの大津波があり、蓮花寺の付近一帯で109人が犠牲になったと伝えられている、寺の正門から入って右手に八十八の石仏があり、これは、村内の信者が犠牲者を供養するために昭和６年に建立したもので、石仏は千人塚まで続いているとの説明が境内でありました。続いて、本堂の裏にある千人塚に案内されました。千人塚は竹藪に覆われていて、犠牲になった109人を埋葬したとされる場所に初代蓮沼村長の瀧川重太氏が盛り土をして供養塔を建立したとのことでした。また、この200㎡の塚のある土地は国有地でありボランティアによって管理されているそうです。明治６年の火災で過去帳を含めた当時の記録が消失し、文化財の対象となっていないことが残念であるとの樋口住職の言葉が印象に残りました。全員で合掌し午前中の調査を終了しました。

元禄地震（1703年）の津波犠牲者を慰霊するために建てられた八十八石仏

千人塚で説明する蓮花寺の樋口住職

■旭市の東日本大震災における被災及び復興状況等の調査

次に東日本大震災で県内最大の被害を受けた旭市に向かいました。旭市は、旧飯岡町を中心に大津波に襲われ、死者行方不明16人、建物全壊300以上の被害を被っています。

昼食休憩は、「いいおか潮騒ホテル」で摂りました。このホテルは、震災被害により休業していましたが、2015年にリニューアルオープンしています。午後２時からの調査は、このホテルに併設されている旭市防災資料館の見学から始まりました。この資料館でDVD等により当時の被害状況、復興・復旧の取り組みについて説明をうけました。当時の津波について第1波よりもその後（午後５時26分）に到達した津波の規模の方が大きく（7.6m）被害も拡大したという説明には驚きました。

午後２時35分、防災資料館を後にして旭市企画政策課菅晃氏、副主査小林淳二氏、総務課角川幸広氏の案内により旭市内の調査に出発しました。最初に視察したのは、旭市三川地区に2013年に設置された津波避難タワー（市内３か所）を訪れました。タワーは、一時避難所として海岸から150m離れた場所に高さ８ｍで設置されており、約100名が避難できるそうです。市側の配慮により実際に登ってみることができました。日常的にこのような施設を頼りに生活している住民の方の心境は如何ばかりかと寒風が身にしみました。続いて飯岡漁港を一望できる飯岡灯台を視察しました。漁港に間近に迫る津波が撮影された場所です。最後に災害公営住宅と被災により移転した飯岡中学校、避難道路を視察しました。公営住宅には仮設住宅から30戸が転居しており、また、高齢の入居者に配慮し３階建てでもエレベーターが設置されているとのことでした。

旭市三川地区の津波避難タワーを視察

以上、旭市内の視察を最後に今回のフィールドワークは午後４時に無事終了しました。

今回のフィールドワーク参加者の皆さん（飯岡刑部岬展望館前にて）

赤荻　渉　プロフィール

千葉市職員、自治労千葉県本部書記長を歴任後、現在は千葉市再任用職員として図書館に勤務、千葉県地方自治研究センター理事